

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分け意識について
Author(s)	デデオール セダー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 26期 : 17 - 26
Issue Date	2011-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038802
Right	
Relation	



「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の 使い分け意識について

デデオール・セダー

1. はじめに

1.1 研究の目的

多くの言語の感謝表現は現在形である。例えば、英語なら「Thank you」、トルコ語なら「Teşekkür ederim」、イタリア語なら「Grazie」などだ。しかし、日本語の場合は現在形の「ありがとうございます」以外に過去形の「ありがとうございました」も使われる。

日本語をはじめ勉強している外国人には、感謝の気持ちを表す表現として「ありがとうございます」が教えられる。さらに、テキストなどには、「ありがとうございました」が「ありがとうございます」の過去形であることしか記述されていない。それによって、日本語の学習者はいずれの表現も同じ意味だと思い、感謝の気持ちを伝える時、意識せずにこれを使ってしまう。

私が日本にはじめて来てから、日常生活によく使われているその表現を様々な場面で違う形でよく耳にした。さらに、実際に注意を受けたこともある。例えば、ある先生に本をいただいたすぐ後に、「ありがとうございました」と言ったのだが、「ありがとうございます」に直されたことがある。その時はじめて、以前習った表現「ありがとうございます」と「ありがとうございました」が現在形と過去形以上の意味を持ち、使い分けられていることを知った。しかし、このような類似表現の使い方を明確に理解することができない外国人の日本語学習者は少なくないのではないだろうか。

本研究では、このような日本語学習者に役立てることができるよう、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」がどういう場面でどのように使い分けられるのかについて調べることを目的とする。

1.2 研究方法

まず、具体的な会話場面や資料から「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分けを明らかにする。次は、アンケート調査で使い分け意識も調査していきたい。

2. 先行研究

「ありがとうございます」と「ありがとうございました」についての研究のうちで両者の使い分けに関する詳細な記述のある先行研究を見ていく。

川鏡（1997）は、「ありがとうございます」は相手の好意や思いやりに対して用いる謝辞であると述べている。一方、「ありがとうございました」は、相手が話し手のためにしてくれた行為を一つの具体的なまとまりとしてとらえ、その完結を認識した場合に用いる謝辞の言葉であることを指摘している。具体例で見てみよう。

(1) 《PTA で子供の担任の先生に》

「いつもお世話になりましたありがとうございます」

(2) 《デパートの店内放送》

「毎度ご来店ありがとうございます」

(3) 《旅行者が記念写真を撮るために、通りかかった人にカメラのシャッターを押してくれるように頼む。「カシャッ」というシャッターの音の後、いっせいに》

「どうもありがとうございました」

(1) は、「いつも」を用いて「今までも、今も、そしてこれからも世話になる」という意味を表し、一つのまとまりが完結していないので、「ありがとうございます」になると説明されている。また、(2) は、お客様が「いつもひいきにしてくれている」とみなし、その好意に対して「～ます」が使われると説明されている。そして、(3) では「カメラのシャッターを押す」という行為の完結に対して「～ました」が使われるとする。さらに、「～ます」と「～ました」がいずれも使える場合もあると述べている。

(4) 《混乱している電車の中で、落としてしまった百円玉を探しているとき、「ありましたよ」と言って、それを拾って手渡してくれた人に》

「ありがとうございます」

「ありがとうございました」

他人の落とし物を親切に拾ってくれたという好意に対する謝辞として「～ます」、百円玉を拾って手渡してくれたという行為の完結を認識し、それに対する謝辞として「～ました」が用いられていると説明している。

では、川鏡の説明からすると、前述した先生に本をいただいた場合も、本を貸して下さったという行為の完結が認識し、それに対する謝辞として「ありがとうございました」

も言えるはずである。しかし、そのとき「ありがとうございます」に直されたのは、どのような原理によっているのかを両者の使い分けを見ながら考察していく。

3. 「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分けについて

3.1 「ありがとうございます」の場合

[ありがとうございます]は実際にどのような場面で使われるのか、それに、その場合どのような事柄が感謝の対象になるのかを具体例で見てみよう。

(1) 《PTA で子供の担任の先生に》

「いつもお世話になりましたありがとうございます」

(2) 《店内に入ったお客さんに》

「(毎度) どうもありがとうございます」

(3) 《お電話がかかってきて応答する際に》

「お電話、ありがとうございます」

(4) 《居酒屋で、会社の上司が》

A：今日は僕のおごりだよ。

《部下たちは喜んで》

B：ありがとうございます。

(5) 《先生に本をいただいた際に》

「ありがとうございます」

(作例)

(6) 《誕生日に「おめでとう」とプレゼントの包みを手渡されたとき》

「ありがとうございます」

(7) 《プレゼントの包みを開け、中にすてきなセーターが入っているのを見とどけてから》

「ありがとうございます」

(8) 《混乱している電車の中で、落としてしまった百円玉を探しているとき、「ありましたよ」と言って、それを拾って手渡してくれた人に》

「ありがとうございます」

(9) 《先生に新年の挨拶をする際に》

「あけましておめでとうございます」

(作例)

(10) 《朝早く先輩に会ったときの挨拶》

「おはようございます」

(作例)

(1)、(2)は普段のことで、これからも続いて行われることが感謝の対象になっているので、「～ます」が使用されている。

(3)は「電話してくれた」という好意が感謝の対象で、電話がかかってきて直後に、はじめの挨拶として「～ます」が用いられている。

(4)は相手が発言した行為がまだ実行されていないため、「～ます」が適当である。

では、問題点の例文の(5)の場合はどうだろう。「本をくださる」という好意に対する謝辞として「～ます」を使用するのは問題ない。しかし、「～ました」を使うと不自然になるのはどうしてだろう。本をもらって直後の場合、「もらう-今」、「感謝-今」であり、感謝の対象を十分に認識できる一定の時間が経っていないため、「～ました」を使うのは不自然である。例えば、本の中身を一度見て、「その中のものが自分に必要であることを知ってくれた」ということを十分に認識してから「～ました」を使うと自然ということだ。

(6)の場合は、「プレゼントをくれる」という好意が感謝の対象となり、そこで、「～ます」を使う。川鏡(1997)の説明では、この場合、「～ました」は不自然になるのは、プレゼントはどのようなものであるかわからないためである。例えば、(7)のように、プレゼントの中を見た後で、「自分の好みを知ってくれていて、きっと時間をかけて探し回ってくれたに違いない」ことを認識できる時点でなければ「～ました」は使えない。もちろん、この時点でも、「プレゼントをくれる」という好意に対する謝辞としてなら、「～ます」が使われるとのことだ。つまり、「プレゼントをもらってすぐの場合」(6)は「～ます」だけが自然で、「プレゼントをもらって、中のものを確認してからの場合」(7)は「もらった-完了」、「自分のものであるそのセーターについての感謝-今」なので、「ありがとうございました」も「ありがとうございます」も使えるとのことである。

(8)は、感謝の対象になる「他人の落とし物を親切に拾ってくれたという行為」の直後なら、「～ます」が自然であると思われる。

(9)は、「あけましておめでとうございます。本年もよろしくお祈いします」というお正月の挨拶言葉である。大岡(1991)は何十日も前にめでたいことがあった人にも、初めて会って祝いを言う場合にも「おめでとうございます」というのが当たり前だと説明している。この言葉は「ありがとうございます」と「ありがとうございました」と少し違って、事柄についてではなく、自分の今の気持ちを伝える挨拶であるので、「あけましておめでとうございます」でなければ不自然になる。例えば、(10)のように、朝遅い挨拶でも、「おはようございました」とは絶対言わないのと同じだと言える。朝の挨拶が遅れて昼に

なれば、「こんにちは」に言い換えられる。つまり、(9)と(10)は、一般的な挨拶言葉であるので、過去形の「～ました」になると、不自然に聞こえると言えるだろう。

3.2 「ありがとうございました」の場合

[ありがとうございました]は実際にどのような場面で使われるのか、それに、その場合どのような事柄が感謝の対象になるのかを具体例で見てみよう。

- (1) 《アンケートの最後に》
「ご協力ありがとうございました」
- (2) 《先生に卒業式の日、お礼を述べる際に》
「色々お世話になり、ありがとうございました」
- (3) 《電話を切る際に》
「お電話どうもありがとうございました」
- (4) 《支払いが終わって、お客さんが店内から出るさいに》
「ありがとうございました」
- (5) 《旅行者が記念写真を撮るために、通りかかった人にカメラのシャッターを押してくれるように頼む。「カシャッ」というシャッターの音の後、いっせいに》
「どうもありがとうございました」
- (6) 《プレゼントの包みを開け、中にすてきなセーターが入っているのを見とどけてから》
「ありがとうございました」
- (7) 《先日、わざわざ来ていただいた先輩に大学の廊下であってお礼を述べる際に》
「わざわざお越しいただきまして、ありがとうございました」
- (8) 《退官記念パーティーに》
「本日はご多忙のところ、皆様お集まりくださり、どうもありがとうございました」
- (9) 《混乱している電車の中で、落としてしまった百円玉を探しているとき、「ありましたよ」と言って、それを拾って手渡してくれた人に》

「ありがとうございました」

(10) 《野球のインタビューで》

「さっきのホームラン、おめでとうございます」

(1), (2), (3)については川鏡 (1997) の「ありがとうございましたは、相手が話し手のためにしてくれた行為を一つの具体的なまとまりとしてとらえ、その完結を認識した場合に用いる謝辞の言葉である」という説明と異なって、湯晴 (2004) は特にこの3つは、具体的動作ではなく、一連のことであると述べている。あるいは、場面的なことが対象となっており、ある場面を終了するために発したことばという印象を受けると説明している。

(4) は、具体的な行為の完結が見られるので、ここでは「～ました」が自然である。しかし、最近では「支払いが終わってお客さんが店内を出る際に」店員は「～ます」を使用することが少なくともあるようだ。それは、お客さんとの関係はここで終わりじゃなくて、これからも来てほしいという意識があるように思われる。

(5) は、「カメラのシャッターを押す」という具体的な動作として認識できるので、「～ました」が自然である。

(6) は、上に説明した通り、「もらった - 完了」、「自分のものであるそのセーターについての感謝 - 今」なので、二つの時間のどちらかを選び、「ありがとうございました」も「ありがとうございます」も言えるであろう。

(7) は、「先日」など、過去を表す表現があり、それに、過去において行われた行為に対して謝辞を表しているので、「～ました」の使用が自然だと思われる。

(8) の場合は、パーティーが行われるところに人々は既に集まっているので、もしくは「パーティーに来る」という行為は既に完了しているので、「～ました」が自然である。しかし、この場合も「～ます」の使用が可能である。「今パーティーにいる、これからいる」方に始まりの挨拶として、感謝を伝える時に「～ます」も使えることができるように思われる。

(9) は、「百円玉を拾って手渡してくれた」という感謝の対象を十分に認識してからなら、「～ました」を使える。しかし、上にも述べた通り、対象となる行為の直後なら「～ます」も可能である。

(10) の場合は、ホームランのすぐ後なら、「おめでとうございます」が適当である。しかし、大岡 (1991) の「何十日も前にめでたいことがあった人にも、初めて会って祝いを言う場合にもおめでとうございますというのが当たり前」という説明と少し違って、試合の後のインタビューなので、その前起こった行為の喜ばしさを「よかったですね」という言葉以外に、もっと丁寧な言い方として「おめでとうございます」で伝えるのも可能であると思われる。

4. 「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分け意識 についての調査

4.1 調査方法

まず、両者ははっきり使い分けられているのかを調べる。その上で、両者の使い分けに影響を与えるものがあるかどうかについても調べていく。アンケート調査は、10代から50代以上までの日本人を対象して行った。2011年の5月下旬と6月下旬の間に実施した。協力者は、広島から東京まで、日本の様々なところからの137名であった。調査は、11場面を設定し、選択肢は ①正しい②なんとも言えない③少しおかしい④おかしいを用意し、それぞれ答えてもらう方法にした。その上、「ありがとうございます」の他に、「おめでとうございます」と「おはようございます」の過去形の使用についても調べるために、3の場面を作った。

4.2 調査結果

表 1 「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分け意識について

場面	正しい	なんとも言えない	少しおかしい	おかしい
1) 電話がかかってきて応答する際に、「お電話、ありがとうございました。」と答えるのは、	13人	17人	31人	76人
2) ご馳走になった先生に改めてお礼を述べる際に、「先週、どうもありがとうございます。」と言うのは、	9人	5人	28人	95人
3) 大学の玄関で先輩に会った時に「いつもお世話になり、ありがとうございました。」と言うのは、	2人	3人	21人	111人
4) 先生に卒業式の日お礼を述べる際に、「色々お世話になり、ありがとうございます」と言うのは、	12人	13人	28人	84人
5) 先生に本をいただいて、お礼を述べる際に、「ありがとうございました。お借ります。」と言うのは、	16人	12人	37人	72人
6) 先日、お越しいただいた先輩に道で会った時改めてお礼を述べる際に、「先日はどうもありがとうございます。楽しかったです。」と言うのは、	22人	11人	38人	66人
7) 駅までの道を教えてもらって、お礼を述べる際に、「はい、わかりました。ありがとうございました。」と言うのは、	112人	12人	7人	6人

8) 電話を切る際に、「お電話、ありがとうございます。」と言うのは、	11人	25人	23人	78人
9) 野球のインタビューで、「さっきのホームラン、おめでとうございます。」と言うのは、	22人	25人	33人	57人
10) 結婚したばかりの知り合いに会った時に、「ご結婚、おめでとうございます。」と言うのは、	9人	10人	32人	86人
11) 朝早く先輩に会った時に「おはようございました」の挨拶は、	7人	4人	6人	120人

表1に表している「ありがとうございます」と「ありがとうございました」について11場面の回答を見れば、両者ははっきり使い分けられることがわかる。例えば、1) の場合は電話がかかってきて応答する際は、「お電話、ありがとうございました」より、「お電話、ありがとうございます」のほうが自然である。それは電話がかかってきて直後に、はじめの挨拶として「～ます」の使用が適切であるからだ。そして、2) の場合は、ごちそうになった先生に、改めてお礼を述べる際に「先週、どうもありがとうございます」より、過去形を表す表現（先週）があるので、「～ました」の使用が適切である。回答を見ると、1) の場合の「～ました」の使用も2) の場合の「～ます」の使用も、たしかに「おかしい」という人が多い。このことから、感謝の対象になることは「直前に行われたのか」、「過去において行われたのか」によって、両者は明らかに使い分けられるということが言えるだろう。

ここで注目したいのは、場面の7) である。駅までの道を教えてもらって、お礼を述べる際に、「はい、わかりました。ありがとうございました。」より、道をおしえてもらった直後の場合で、感謝の対象を十分に認識できる時間も経っていないため、「はい、わかりました。ありがとうございます」のほうが自然だと思われる。しかし、回答を見ると、回答者の多くはこの場合「-ました」の使用が「正しい」と言っている。それは、どのような意識を持っているのだろうか。角田(2001)は、「ありがとうございました」は会話の区切り、場面の区切りを示す印、あるいは、合図であると述べている。その説明からすると、7の場合、道を教えてもらった話し手は、「-ました」を使うことで、相手にこれ以上迷惑をかけないようにし、その状況を終わらせたいという意識を示しているのではないかと言えるだろう。

さらに、表1の9)、10)、11)の場面を見ると、「おめでとうございます」と「おはようございました」の使用について「おかしい」と思っている回答者は多くいることがわかる。どれも一般的な挨拶言葉であるから、「-ます」の使用でなければ、不自然に聞こえるという意識があるからではないかと思われる。しかし、ここで面白いのは、回答者の何人かは9)、10)、11)の場面の「おめでとうございます」と「おはようございまし

た」の使用について、全国的には「おかしい」のだが、広島弁なら「オッケー」というコメントがあったことだ。そこで、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の場合も、そういう影響があるのかをみるため、アンケートに協力してくださった回答者の出身も見直してみると、少なくとも特に50歳以上で広島県と山口県出身の方は「ありがとうございます」が適切である場面でも、「ありがとうございました」を用いるということがわかった。そのことから、「-ます」と「-ました」の使用に方言の影響もあり、その上、広島出身者のほうが「-ました」を用いる傾向があると言える。

5. まとめ

本研究は、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」が、どのような場面でどのような意識で使い分けられるのかを明らかにすることであった。両者の使い分け意識を見ていくために、先行研究の調査とアンケート調査を行った。得られた結果を以下に二点でまとめる。

1. 使用意識と実際の説明について、先行研究とくい違いがみられた。「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の使い分けについて今までの研究では、「直前に行われたことが感謝の対象になる場合」と「これからも続いて行われることが感謝の対象になる場合」に「ありがとうございます」、また、「過去において行なわれたことの完結を認識した場合」と「場面を終わらせたい意志がある場合」に「ありがとうございました」が使われると説明されている。しかし、調査結果をみると、過去において行なわれたことの完結を認識した場面でも（場面6）、「ありがとうございます」が使われることが見られた。それは、感謝の気持ちを今も持っているという意識が働いているからと思われる。さらに、完結を認識していない場面でも（場面7）、「ありがとうございました」が使われるのが見られた。それは、場面を終わらせたい意識が働いているときに限るのではないかと考えられる。
2. 方言意識による使い分けもみられた。広島県と山口県出身で、特に50歳以上の方は「～ございました」をよく用いる傾向が見られた。藤原（1978）の方言敬語法についての報告では、広島県と山口県では「ございます」より「ございました」の使用のほうがより丁寧な表現と意識されることが示されている。そのことから、より丁寧な意識の場合に広島県の方は過去形の「ありがとうございました」「おめでとうございます」「おはようございました」の表現を使うことがわかった。

両者の使い分けは、今後、過去形と現在形で使い分けるとの意識が浸透すると、ますます厳密に区別されてくることが予想される。

今後の課題としては、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の他に、「お疲れさまです」「お疲れさまでした」、「ごちそうさまです」「ごちそうさまでした」のような表現の使い分け意識も考察していきたい。また、様々な年齢層におけるデータを集め、地域や世代によってどのような違いがあるのかについても調べたい。

参考文献

1. 川鏡恵子 (1997) 「『ありがとうございます』『ありがとうございました』」日本語教育誤用例研究会『類似表現の使い分け指導演法』アルク
2. 角田三枝 (2001) 『日本語クラスの異文化理解—日本語教育の新たな視点』くろしお出版
3. 湯晴 (2004) 「『ありがとうございます』『ありがとうございました』」の使い分けについての一考察」松山東雲女子大学人文学部紀要, 12 : 93-104, 2004
4. 大岡信 (1991) 『日本語相談 四』朝日新聞社
5. 藤原与一 (1978) 『昭和日本語の総合的研究第一巻—方言敬語法の研究』春陽堂